



# 東京YMCA

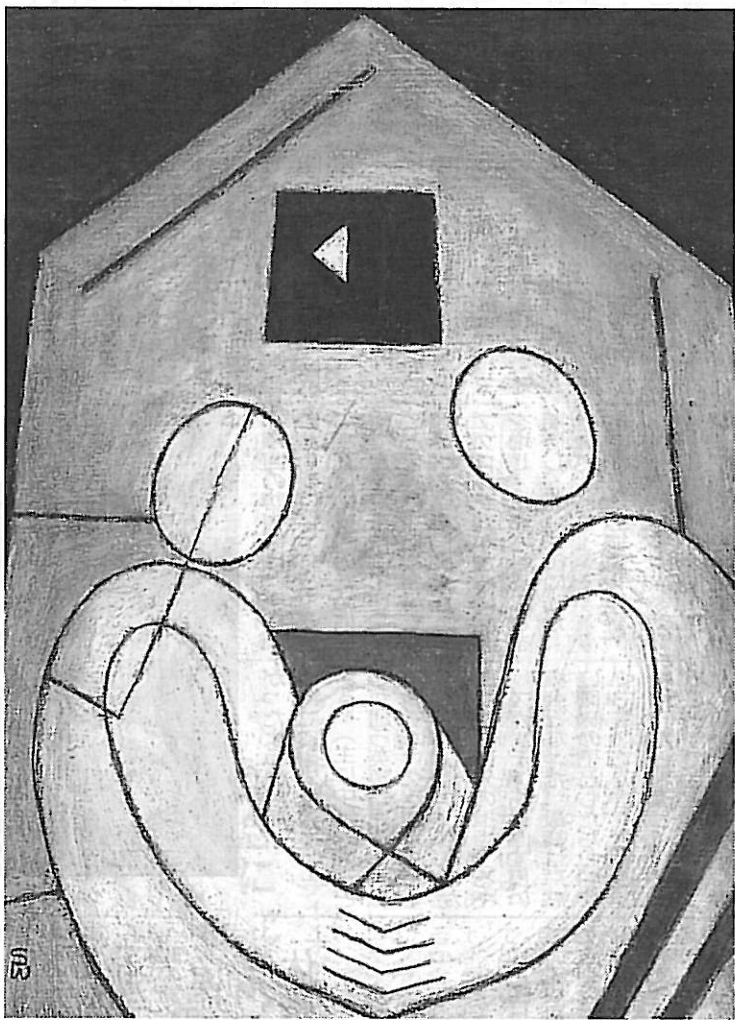
2007 12 月号

発行所 東京キリスト教育年會 発行人 新井廣和  
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

### 東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。



聞いている人は皆、  
イエスの賢い受け答えに驚いていた。  
両親はイエスを見て驚き、母が言った。  
「なぜこんなことをしてくれたのです。  
御覧なさい。お父さんもわたしも心配して  
捜していたのです」

(ルカによる福音書第2章47〜48節)

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強し、支えあう地域社会を築きます。



わたしたちは

忘れられていない

日本基督教団新潟教会 牧師 上島 一高

わたしたちの新潟は、この3年間に三つの大きな自然災害にみまわれた。水害の折、三条市街地の南半分は洪水に飲み込まれた。三条教会は切れた堤防の反対側で無事だったので、教会員たちは被災した市民のために何かしたいと願った。そして教会をボランティア派遣と宿泊の場所にすることを決断したのだ。

ただ、たまたま三条教会に牧師がいないためお手伝いをしていただきたしを合せて、皆そのようなことは未経験で、本当に何か出来るのか分からないといった状況だった。

そんなときに、教会を利用していただき、わたしたちのなすべき務めに気づかせてくださったのは、阪神淡路大震災を経験した兵庫の人々、そしてYMCAの人々だった。

YMCAの人々は、直接わたしたちの三条教会ボランティアセンターそのものの支援に来られたわけではなく、市のボランティアセンター運営にどんな支援ができるか、その他YMCAとして何が出来るかを調べ、人員を送るために教会に宿泊されたのだ。しかし、わたしたちからすれば、そのような大切な仕事のために教会が役立ったこと自体がうれしいことだったし、夜の時間を共にする中で、ボランティアの意義を感じ取ることが出来た。

この夏の新潟県中越沖地震後、わたしは被災地の柏崎教会に立ち上げたボランティアセンターに常駐しており、同じように、YMCAの方々を迎えた。

これほど災害が続くと、わたしたち新潟の者は、自分たちだけが運から見放されたような気持ちになってしまう。しかし、もっとも辛いときに、隣人となってくださる方々の存在を再び認めたとき、どんなときにも決して見放されたままではないという安心感を与えられた。

クリスマスの主役たちは、皆目立たない人々か、周りから忘れられているように見える人々だ。ところが光は彼らに当てられる。あときマリアはこう応えた。「神は、わたしに目を留めてくださった。」  
その光は、わたしたちにも当たっている。

### 赤三角

1985年から、5年間を長崎で暮らした。晴れた日は遠く天草まで望め、夜は漁火が燈り幻想的な美しさだった。

食べ物も美味しく感激の連続だったが、種々の手続で市役所に行った折、用途欄に「原爆」という文字を見て、「ああ、こは長崎なのだ」と実感したものだ。▼同じ頃、長崎へ転勤してきた方と友だちになった。当初、小学生だったお嬢さんは長崎の原爆のことを熱心に調べていたが、そのうち夜中に突然泣き出すようになった。「長崎はいや。怖い。東京に帰りたい」友人は娘を抱きしめて一緒に夜空を眺めた。「ほら、お星さまがきれいでしょ。あんなにキラキラ光っているのは二度と戦争が起きませぬよ」と、長崎の人が一生懸命祈っているからなのよ」と毎晩語りかけたそう。

▼毎年夏になると朗読劇「この子たちの夏1945・ヒロシマ ナカサキ」が全国各地で上演される。子どもたちの、そして母親たちの手紙や手紙、詩などによって構成された1時間半の舞台だが、声高に反戦を唱えるのではなく、悲しい、愛おしい母たちの声が朗読される。劇を見た子どもたちの感想文に「すごく怖かった、早く帰ってお母さんに会いたい」とあった。もうすぐクリスマス。星は何かを教えてくれるだろうか。私たちの手のひらの中にこそ、平和の種はあるのだと信じて...

(会員部運営委員) 長谷川あや子